

玉野市埋蔵文化財発掘調査報告（5）

# 地蔵山1号墳

1992. 3

地蔵山遺跡発掘調査委員会

## 序

岡山県の南部に位置する玉野市は、瀬戸内海に面する風光明媚で、気候の穏やかな所です。平成2年8月3日をもって市政50周年を迎え、これからも益々発展する街であります。

玉野市は歴史的に見ますと、瀬戸内海に面する海岸線において、製塩遺跡が連続して存在するとともに、『日本書紀』等の記録を見ましても盛んに製塩が営まれていたことがわかります。

ここに報告します地蔵山1号墳は、三井造船株式会社・玉野事業所の林地開発事業予定地内にあって、関係者間の協議により現状保存が困難なことから、やむなく記録保存のため発掘調査を実施したものです。その結果、地蔵山1号墳は横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期の円墳であることが判明しました。

本書はこうした調査の成果をまとめたものです。今後この報告書が文化財の保護、保存のために活用され、また、地域の歴史を研究する資料としてご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書の作成にあたりましては、岡山県教育委員会からは多くのご指導とご助言をいただきとともに、三井造船株式会社・玉野事業所ならびに備南開発株式会社および、有志の方々からご援助とご協力をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成4年3月

地蔵山遺跡発掘調査委員会

委員長 信原定治

## 例　　言

1. 本書は、地蔵山林地開発に伴う「地蔵山1号墳」の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、岡山県玉野市玉3丁目2500-8番地内に所在するが、平成2年10月15日をもって当地は分筆が行われ、現在岡山県玉野市玉3丁目2500-10番地内である。
3. 発掘調査にあたっては、事業上である備南開発株式会社から多大なるご協力をいただいた。
4. 発掘調査期間は、平成元年11月27日から平成2年3月10日で、引き続き遺物の整理作業を行い、平成3年度に報告書作成作業を実施した。
5. 発掘調査および本書の作成は、後に記す「地蔵山遺跡発掘調査委員会」が実施し、おもに玉野市教育委員会社会教育課職員　寶藏光辰が担当した。
6. 本報告書に使用した高度値は海拔高であり、使用した方位はいずれも磁北である。
7. 本報告書に掲載した第2図「地蔵山1号墳周辺遺跡分布図」は、建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図「宇野」を縮小したものである。
8. 発掘調査による遺物・写真・実測図等は、玉野市総合文化センター内の文化財収蔵庫に保管している。

## 本文目次

序	
例 言	
目 次	
第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	1
1. 調査体制	2
2. 日誌抄	3
第2章 遺跡の環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査結果	11
第1節 占墳の立地と調査前の状況	11
第2節 墳丘と外部施設	14
1. 墳丘	14
2. 周溝	15
第3節 横穴式石室	15
第4節 遺物	24
1. 遺物の出土状況	24
2. 出土遺物	26
第4章 まとめ	31

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	5
第2図 地図山1号墳周辺遺跡分布図 （1/50,000）	9
第3図 古墳位置図（1/5,000）	10
第4図 地形測量図（1/300）	12
第5図 墳丘測量図（1/125）	13
第6図 石室平面図（1/50）	16
第7図 横穴式石室実測図（1/30）	17
第8図 墳丘・周溝土層断面図 （1/25）	19
第9図 石室内遺物出土状況（1/25）	21
第10図 出土遺物(1)（1/4）	24
第11図 出土遺物(2)（1/4）	25
第12図 出土遺物(3)（1/4）	26
第13図 出土遺物(4)（1/4）	27
第14図 出土遺物(5)（1/2）	28

## 表 目 次

土器観察表 ..... 29

## 図 版 目 次

図版 1-1 地蔵山 1 号墳 遠望（北から）	2 石室内遺物出土状況 2（東から）
2 調査前墳丘遠望（北から）	
図版 2-1 調査前墳丘（北から）	図版 10-1 石室内遺物出土状況 3
2 調査前墳丘（南から）	2 石室内遺物出土状況 4
図版 3-1 調査前墳丘及び石室状況（北から）	3 石室内遺物出土状況 5
2 表土除去後墳丘及び石室状況（北から）	図版 11-1 墓道部遺物検出状況
図版 4-1 墳丘全景（北西から）	2 石室内棺台検出状況
2 墳丘全景（北から）	図版 12-1 石室北側側壁 1（南から）
図版 5-1 墳丘及び周溝（北東から）	2 石室北側側壁 2（南から）
2 周溝（東から）	3 石室北側側壁 3（南から）
図版 6-1 墳丘北々東側上層断面（北東から）	4 石室北側側壁 4（南から）
2 周溝内埋土状況（東から）	5 石室南側側壁 1（北から）
3 石室内盗掘痕上層断面（東から）	6 石室南側側壁 2（北から）
図版 7-1 墳丘東南東側上層断面（北東から）	7 石室南側側壁 3（北から）
2 墳丘南々西側上層断面（南から）	図版 13-1 石室奥壁（西から）
図版 8-1 石室内落石及び仕切り石状況（西から）	2 墳丘盛り土除去後石室全景（北西から）
2 石室内落石及び仕切り石状況（東から）	図版 14-1 墳丘盛り土除去後石室全景（北東から）
図版 9-1 石室内遺物出土状況 1（東から）	2 南側石室掘り方状況（南東から）
	図版 15-1 北側石室掘り方状況（北東から）
	2 地蔵山 1 号墳調査終了後遠景（北から）

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査の経緯

昭和63年10月3日、備南開発株式会社は、三井造船株式会社玉野事業所の承諾をえて、三井造船株式会社玉野事業所地内の岡山県玉野市玉3丁目2500-8から9番地に所在する地蔵山のうち、約12ヘクタールの林地開発許可申請を、玉野市農林水産課に提出した。

このうち、玉野市玉3丁目2500-8番地の約7ヘクタールは、「玉野市文化財地図」によると、ほぼ全域が散布地になっているため、備南開発株式会社は、昭和63年12月23日付けで、文化財保護法第57条の2第1項の規定に基づく届出を提出した。これを受けて、岡山県教育委員会が現地確認調査を行ったところ、事業区域内に古墳を1基発見した。

関係者間による協議の結果、削平する尾根の先端頂上部に古墳が存在するため、古墳を現状で保存することは不可能であり、やむなく記録保存することとし、平成元年10月16日付けで文化財保護法第57条第1項の規定に基づく、埋蔵文化財発掘調査の届出を提出するとともに、平成元年11月1日「地蔵山遺跡発掘調査委員会」を設置した。

発掘調査は調査方針に関して調査委員会で種々協議を重ね、おもに玉野市教育委員会社会教育課の担当職員があたり、平成元年11月27日から平成2年3月10日まで実施した。

## 第2節 調査の経過

地蔵山1号墳の発掘調査は、平成元年11月27日から平成2年3月10日まで実施した。調査現場の発掘作業では、三井造船株式会社玉野事業所および有志の方々に協力を得た。

発掘調査は、雑木の除去等、現場の整備が完了してから着手した。まず、古墳の存在する地根の確認調査を開始し、並行してグリッド杭の設置を行ったのちに地形測量を実施した。地形測量の終了後墳丘の表土除去作業を行った。年の明けた1月8日から墳丘の盛り土の検出と石室内埋土の掘り下げを並行して行い、遺物の検出、図面作成、写真撮影等を実施した。その後周溝の検出、石室内、墳丘等の図面作成、写真撮影を行い、2月下旬から墳丘部の解体作業に入った。この作業と並行して、石室内埋土のふるいによる選別作業を行った結果、埋土中から耳環等が検出された。3月上旬から徐々に現場の撤収作業を行なながら、石室平面図の作成、写真撮影を行い、3月10日をもって全ての作業を終了した。

## 1. 調査体制

地蔵川遺跡発掘調査委員会

職名	氏名	所屬	任期
委員長	信原定治	玉野市教育委員会教育長	平成元年度～
副委員長	伊藤晃	岡山県教育庁文化課課長補佐 岡山県古代吉備文化財センター 調査第三課課長	平成元～2年度 平成3年度～
"	土岐威	玉野市教育委員会教育次長	平成元～2年度
"	高畠勝正	"	平成3年度～
委員	柳瀬昭彦	岡山県古代吉備文化財センター 調査第一課課長補佐 岡山県教育庁文化課課長補佐	平成元～2年度 平成3年度～
"	名合照龟	玉野市文化財保護委員	平成元年度～
"	坂本文男	玉野市教育委員会社会教育課課長	平成元～2年度
"	斎長英明	"	平成3年度～
"	武下嘉之	玉野市教育委員会社会教育課課長補佐	平成元年度
"	斎長英明	"	平成2年度
"	長尾實	"	平成3年度～
委員(調査員)	寶藏光辰	玉野市教育委員会社会教育課芸員	平成元年度～
監事	虫明正	備南開発株式会社企画室長	平成元年度～
"	小西茂平	玉野市教育委員会庶務課課長	平成元年度
"	岡本忠良	"	平成2年度～
事務局長	浜本康雄	備南開発株式会社企画部長	平成元年度～
事務局員	井上節夫	玉野市教育委員会社会教育課 社会教育係長	平成元年度～

## 2. 日誌抄

平成元年

- 11月27日（月） 地蔵山1号墳調査開始。現場整備。
- 30日（木） 現場整備。調査前写真撮影。確認調査開始。
- 12月4日（月） 確認調査。測量杭設定。
- 5日（火） 測量杭設定。東側石検出。地形測量。
- 8日（金） 地形測量。東側石検出後写真撮影。
- 11日（月） 墳丘表土掘り下げ。地形測量。
- 15日（金） 墳丘表土掘り下げ。石室内トレンチ掘り下げ。
- 20日（水） 墳丘表土掘り下げ・清掃、表土セクション図面作成。
- 21日（木） 墳丘表土掘り下げ・清掃、写真撮影・トレンチ掘り下げ。
- 22日（金） 墳丘トレンチ掘り下げ・地形測量。
- 26日（火） 石室内掘り下げ。
- 27日（水） 現場整備。

平成2年

- 1月8日（月） 墳丘トレンチ延長・北側盛り土検出。石室内転落石実測。
- 9日（火） 墳丘北側盛り土検出。石室内転落石重機により除去。
- 10日（水） 墳丘トレンチ延長、南北セクション写真撮影・実測。
- 11日（木） 墳丘セクションベルト掘り下げ。東西セクション写真撮影・実測。
- 17日（水） 石室内転落石写真撮影・実測・掘り上げ。
- 18日（木） 石室内掘り下げ。
- 23日（火） 石室内清掃。渠道口検出。
- 30日（火） 石室内清掃。渠道口検出。墳丘トレンチ掘り下げ。
- 2月2日（金） 石室内清掃・写真撮影。
- 5日（月） 閉塞石実測。墳丘トレンチ掘り下げ。
- 6日（火） 墳丘トレンチ掘り下げ。石室内割り付け。閉塞石掘り上げ。
- 7日（水） 墳丘トレンチ掘り下げ。石室内割り付け・平面実測。
- 13日（火） 石室内側面図。仕切り右側面図。墓道部遺物取り上げ。墳丘盛り土検出。
- 15日（木） 仕切り右側面図。石室内遺物取り上げ。墳丘盛り土検出。
- 16日（金） 石室内側面図。石室内遺物取り上げ。墳丘盛り土検出。

- 17日（土） 墳丘セクション写真撮影。墳丘盛り土検出。
- 20日（火） 墳丘セクション実測。墳丘盛り土検出。
- 24日（土） 石室内清掃。墳丘盛り土検出。
- 26日（月） 墳丘清掃・写真撮影。
- 27日（火） 墳丘盛り土地形測量・地山検出。
- 28日（水） 石室内側面図。墳丘地山検出。
- 3月7日（木） 墳丘地山検出。石室内清掃。
- 8日（金） 墳丘地山清掃、写真撮影。
- 9日（土） 墳丘地山測量。石室外側測量。
- 10日（日） 石室レベル測定。あと片づけ。地蔵山上号墳発掘調査終了。

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

地蔵山1号墳の所在する玉野市は、岡山県の南端部中央の児島半島南部に位置する。海岸線の総延長は約44kmを測り、南から南東の地域は瀬戸内海に面している。

倉敷市との境に位置する、王子ヶ岳から見下ろす瀬戸内海国立公園の景観は素晴らしい、玉野市の南西部に位置する渋川海岸は、夏になると海水浴客でにぎわっている。市街地背後の丘陵地は、花崗岩の風化や侵食が著しく進み、巨岩奇岩が丘陵高所に残存した景観が各所にみられる。

玉野市は、南は瀬戸内海をへだてて香川県香川郡直島町および香川県高松市、北は児島湖をへだてて岡山市、北西は児島郡瀬崎町、西は倉敷市とそれぞれ接しており、1988（昭和63）年に瀬戸大橋が開通するまで、四国と最短距離で結ぶ交通の要所になっていた。

遺跡の位置する玉野市玉地区には、1919（大正8）年に三井物産船舶部が造船所を設立し、現在も三井造船株式会社玉野事業所として継続して操業されている。

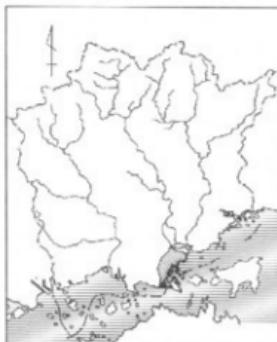
この造船所が基幹産業として玉野市の発展に大きく貢献したが、玉地区から和田地区の海岸線に沿って営まれていた塩田に工場が建設されたため、市街地から海が隔てられている状況である。

また、田井地区から宇野地区にかけての海岸線は、住宅地や、瀬戸大橋の開通まで四国への玄関口であった宇野港の造成等により、大規模な埋め立てが行われてきた。

### 第2節 歴史的環境

児島半島の南端に位置する玉野市には、先土器時代から中世に至る種々の遺跡が確認され、一部調査報告もなされている。

先土器時代の遺跡としては、「宮田山遺跡」（注1）および「出崎遺跡」（注2）が知られており、サスカイト製のナイフ形石器・尖頭器・細石器等が出土している。特に宮田山遺跡のナイ



第1図 遺跡位置図

フ形石器は、「宮田山ナイフ型石器」として岩名である。

また、行政的には香川県に含まれる瀬戸内海の海底からは、しばしば底引き網漁によってナウマン象の化石が採集されている。

縄文時代の遺跡としては、押型文土器やサスカイト製の石鎌が出土している「畠の浦遺跡」(注3)や「波張崎遺跡」(注4)などの早期の遺跡が、瀬戸内海に面した低丘陵上に見られる。前期以降の時期の遺跡としては、JR宇野駅東側の競輪場に近接した位置に「長崎鼻遺跡」(注5)が存在する。

弥生時代前期の壺形土器が玉野市波川海岸から発見されているが、遺跡の概要については不明である。中期になると、玉野市玉に位置する「的場山遺跡」(注6)や、玉野市と岡山市の境に位置する「只脇山遺跡」(注7)などの、『高地性集落遺跡』が存在する。後期になると、畿内の初期土器によく見られる叩き目を施した土器が多数出土し、古墳時代初頭まで継続された「深山遺跡」(注8)が存在する。

古墳時代の遺跡が立地しているのは、瀬戸内海に面した海滨が多く、「深山遺跡」のように海岸線から離れた内陸の谷部に位置しているものは、むしろ特異な存在である。

玉野市内には横穴式石室を持つ古墳が10数基確認されているが、それらの中で玉野市田井地区に位置する、墳丘径約13m、石室長3.3m、回転2.7m、同高さ1.8mの横穴式石室を内部1体とする、孫屋古墳から出土した土器群を、現在玉野市総合文化センター内郷土資料展示室に展示している。

1958(昭和33)年、三井造船株式会社玉野事業所によって行われた地蔵山一帯の治山事業中に、地蔵山1号墳より北へ約600mの位置で、石室幅約1m、石室高約1.5m、石室内奥行き約3mの規模の横穴式石室を持つ古墳が発見されている。当古墳の詳細な発掘調査報告は発表されていないが、出土遺物は平成2年5月25日まで三井造船玉野事業所所長室に保管展示されていた。それ以後は玉野市総合文化センター内文化財収蔵庫に保管している。この古墳を今回発掘調査した地蔵山1号墳に対して地蔵山2号墳とする。

地蔵山2号墳が発掘されるのとほぼ同時期には、地蔵山1号墳の近くの三井造船株式会社玉野事業所敷地内の海岸部から師楽式土器が発見されている。(注9)

その後1980(昭和55)年、玉野市の中央からやや東寄りの出崎と呼ばれる半島の付け根の西側に位置する「沖須賀遺跡」(注10)では、玉野市立山田中学校の改築工事に先立ち発掘調査が実施され、古墳時代および平安時代から鎌倉時代の製塩に関連した炉跡などの遺構が発見されている。

この他にも玉野市内においては、山田地区の「山田原遺跡」・「品の作遺跡」、田井地区の田井の浦甲式・乙式で知られる「田井の浦遺跡」(注11)など、製塩土器が出土する遺跡が存在し

ており、海岸線近くで製塩を営んだ多くの集団がことがうかがわれる。

以上のことから、土器製塩の行われていた時期には、玉野市の海岸線においても、土器製塩が連続的に行われていたと推察される。しかし、玉野市の田井地区から宇野地区を経て口比地区に至る海岸地域においては、前述のように工業地化や市街地化が進行しており、古い時期の段階で土器の散布地や丘陵に存在していた古墳等が消滅しているため、詳細な遺跡分布状況は把握できない。

飛鳥時代になると、記録に残るものは『児島屯倉』に関してのものが多く見られる。『日本書記』欽明天皇17(556)年秋7月6日の条には、蘇我大臣稻日宿禰等を吉備の児島郡に遣わして山城<sup>さんじや</sup>屯倉を置き、葛城山田直端子を田令に任じたことが記されている。同じく『日本書記』欽明天皇30(569)年の条には王膳津なるものが、美作の白猪屯倉に派遣され田部の丁籍を定めた功により白猪史という姓を賜り、葛城山田直端子の副とした記載があり、葛城山田直端子は、このとき白猪屯倉の田令となっていたものと思われる。

『日本書記』敏達天皇12(583)年の条には、吉備海部直羽鳥をして百済より日羅を召喚したときに、吉備児島屯倉において大伴總子進を派遣して慰勞したと記されていることからみて、児島屯倉が田部の丁籍を定めて經營される白猪屯倉などとは性格の異なった、つまり海上交通の要所に設置された特殊な屯倉であったと推察される。

この児島屯倉の所在地については諸説があるが、現時点では定まっていない。

平城京出土の木簡によると、調査を佛前國児島が行っていたことがわかり、『日本後記』延歴18(799)年の条においては、児島郡の百姓は塩を焼いて業としていたが、新しく発布された「格」により山野浜島は公私共用となったため、勢家豪族は塩業従事の百姓から海浜を奪い、貧者はますます貧しくなったという記載が見られる(注12)。このような資料から推察して、児島半島南部周辺及び瀬戸内海の島々では、実際に塩業従事の百姓の存在が知られ、當時盛んに製塩作業が行われていたことがうかがわれる。

中世の遺跡としては、児島半島の丘陵や山頂に城跡が多く見られる。玉野市庄内地区には常山城跡(注13)・麦飯山城跡が存在している。山田地区から番田地区にかけては特に城跡が集中しており、高畠城跡・丸山城跡・番田城跡・相引城跡・胸上城跡・矢の瀬城跡・屋敷山城跡、口比地区には地蔵山古墳から南へ約700mの位置に四宮城跡が存在する。

このように地蔵山古墳の周辺には、先土器時代から戦国時代にかけての遺跡が数多く存在するが、突出して目につくのは各時代の製塩に関する遺跡である。玉野市の海岸部あるいは、遺跡が機能していた時期には海岸であったと思われる位置には、製塩に専る遺跡が連続して存在していることから、地蔵山古墳は製塩に関する遺跡と、何らかの関係があるのではないかとの予想が調査前から立てられた。

## 注

- (注1) 西川宏・杉野文一「岡山県玉野市宮田山西地点の石器」『古代吉備』 第3集 1959年
- (注2) 「玉野市の夜明け（先土器時代）」『玉野市史』 玉野市役所 1970年
- (注3) 鈴木義昌・高橋謙「縄文時代の発展と地域性・般戸内一」『日本の考古学』Ⅱ 河出書房 1965年
- (注4) 平井勝「玉野市波張崎遺跡確認調査報告」『玉野市埋蔵文化財発掘調査報告』(1)  
玉野市教育委員会 1980年
- (注5) 「採取の生活（縄文時代）」『玉野市史』 上野市役所 1970年
- (注6) 佐藤美津男「児島郡日比町の場山遺跡（略報）」『古備考古』第37号 1938年
- (注7) 近藤義郎・小野昭「岡山県貝殻山遺跡」『高地性集落跡の研究』資料編 学生社 1979年
- (注8) 間壁忠彦「玉野市川井深山遺跡」『倉敷考古館研究集報』第6号 倉敷考古館 1969年
- (注9) 「製塩・祭祀遺跡と後期古墳（古墳時代）」『玉野市史』玉野市役所 1970年
- (注10) 福岡正繼「沖須賀遺跡」『玉野市埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 岡山県玉野市文化財保存会  
1981年
- (注11) 「製塩・祭祀遺跡と後期古墳（古墳時代）」『玉野市史』玉野市役所 1970年
- (注12) 「蘇我氏と児島屯舎・児島屯倉と古備海部羽島（飛鳥時代）」『玉野市史』玉野市役所 1970年
- (注13) 向本寛久「常山城発掘調査報告」『玉野市埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 玉野市教育委員会  
1980年



#### 遺跡分布図

- |               |               |             |
|---------------|---------------|-------------|
| 1 地蔵山1号墳      | 2 地蔵山2号墳      | 3 地蔵山遺跡     |
| 4 向日比遺跡       | 5 大砂場古墳       | 6 長崎鼻古墳     |
| 7 喜兵衛島北西浜遺跡   | 8 喜兵衛島北東浜遺跡   | 9 喜兵衛島南東浜遺跡 |
| 10 喜兵衛島南西浜遺跡  | 11 喜兵衛島1~16号墳 | 12 屏風島遺跡    |
| 13 屏風島1・2号墳   | 14 屏風島3~6号墳   | 15 京ノ上鷺島遺跡  |
| 16 京ノ上鷺A1~3号墳 | 17 京ノ上鷺B1~5号墳 | 18 局島遺跡     |
| 19 はしもと畠遺跡    | 20 だるま石上古墳群   | 21 家浦遺跡     |
| 22 重石遺跡Ⅱ地点    | 23 重石遺跡Ⅰ地点    | 24 重石2号墳    |
| 25 重石1号墳      | 26 くずほ下遺跡     | 27 八目山遺跡    |
| 28 オカメ鼻遺跡     | 29 くらら遺跡      | 30 外が浜遺跡    |
| 31 串山遺跡       | 32 横防遺跡       | 33 葛島A古墳群   |
| 34 葛島遺跡Ⅱ地点    | 35 葛島B古墳群     | 36 葛島遺跡Ⅲ地点  |
| 37 葛島C古墳群     | 38 荒神島遺跡      | 39 荒神島古墳    |

第2図 地蔵山1号墳周辺遺跡分布図 (1/50,000)



第3図 古墳位置図 (1/5,000)

## 第3章 調査結果

### 第1節 古墳の立地と調査前の状況

地蔵山1号墳は、標高156.6mの地蔵山の尾根筋から東方向に派生した、標高76.6m付近の尾根上に位置する。

古墳からの眺望は、西から北東にかけて開けており、北東に玉野市街が見え、南に瀬戸内海をはさんで高松市街地、西に備讃瀬戸大橋が遠くかすんで見える。

地蔵山1号墳は玉野市玉地区に位置し、玉野市の最南端に存在するといつてもよいであろう。

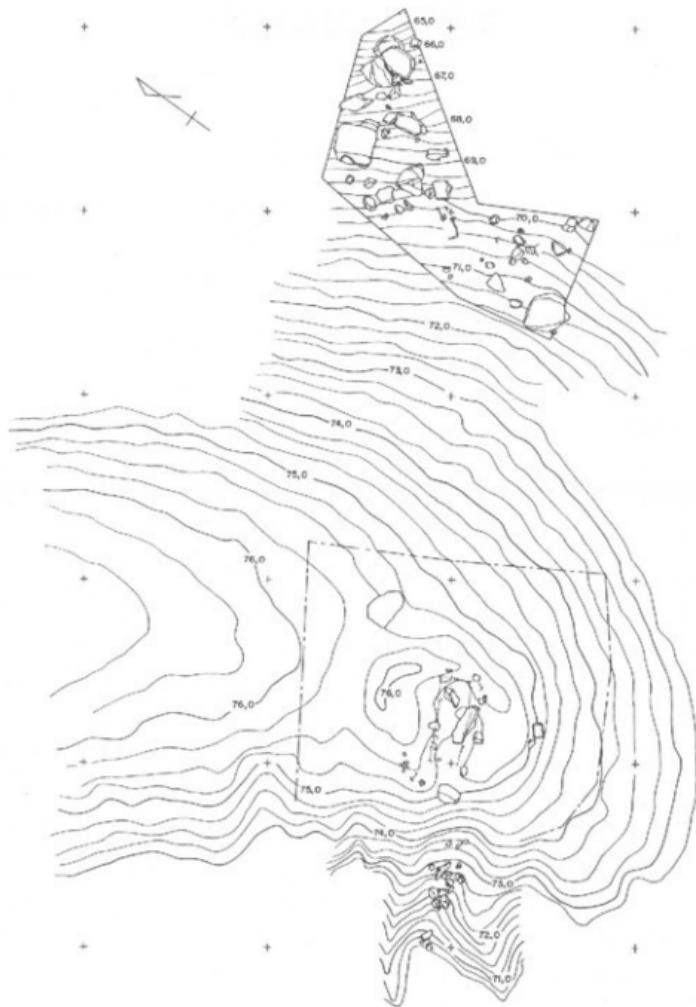
玉野市の総面積のうち60%近くを占める山林は荒廃が激しく、地蔵山1号墳の所在する地域においても花崗岩が露出し、風化、侵食が著しく進んだため、昭和30年代後半、三井造船株式会社玉野事業所によって治山および植林事業が行われた。このため、当古墳の位置する尾根はもとより、地蔵山一帯は旧地形とは多少異なっていると思われる。

発掘調査にかかる以前の平成元年3月23日に、地蔵山は古墳周辺部を含め、当古墳から北東部一帯において山火事が発生し、山林を焼失したために、古墳周辺は広く見渡すことができ、調査前の立会時においても、墳丘を容易に確認することができた。この結果、こんもりした墳丘が存在するが、墳丘中央部はへこみ、天井石であると思われる石が露出していることが判明した。

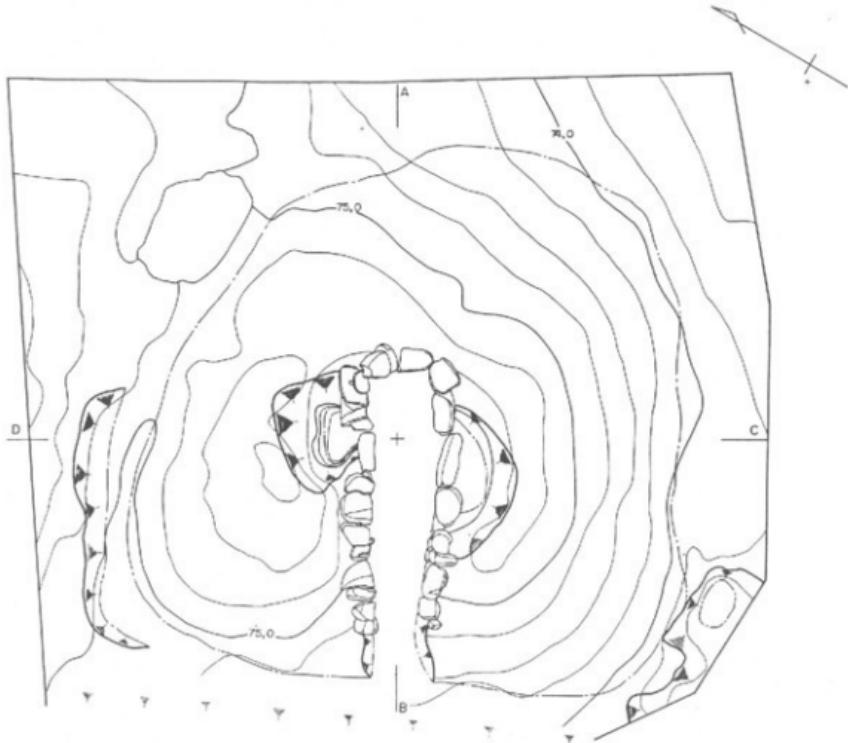
墳丘中央部のへこみは幅約3m、長さ約6m、残存墳丘最高部とへこみの最低部との比高約60cmで長軸をほぼ南北方向に向けており、このへこみの北東端には石室奥壁上端のものであろうと思われる石が看取できたことから、ほぼ石室に該当する位置であろうと推定された。墳丘中央部のへこみに続くかたちで南北側の墳丘がわずかにへこみ、墳丘中央部のへこみが南北側に開口している状況である。このことから、墳丘の南北の位置に横穴式石室の開口部が存在していると推察された。

へこみのはば中央には、天井石のものであったと思われる長辺約220cm、短辺約80cmの石材が、長軸をほぼ東西に向けて存在していた。

しかし、この石材はすでに表土上にあることから、天井石はすでに除去され、内部も盗掘を受けているのではないかとの予測がたてられた。また、古墳南北側は崖崩れがおこっており、閉塞石あるいは羨道口隔壁のものであったと思われる石を、古墳より約2.5m下方で数個確認



第4図 地形測量図 (1/300)



第5図 墳丘測量図 (1/125)

した。

古墳周辺一帯は、1978（昭和53）年刊行の「岡山県遺跡地図」によれば、「地蔵山遺跡」として弥生時代から古墳時代にかけての散布地であることから、他の遺跡の存在を考えて、長さ30mから10m、幅約2mのトレンチを尾根上に縦横に設定したが遺物、遺構は一切発見されなかった。

古墳中心から東約5mの位置に、墳丘に隣接した状態で高さ約2mの露岩がみられた。また古墳中心から北東方向の東側の尾根斜面にも大型の露岩が数個散布しており、これらも調査の対象とした。

## 第2節 墳丘と外部施設

### 1. 墳丘

発掘調査の結果、墳丘は地蔵山から南東方向に派生した尾根の稜線から若干南西側に下った、南々東と北々西の墳丘裾部での比高約1m:20cmを測る斜面に、石室長軸を尾根稜線に対してほぼ直交する角度を有して構築されている。

墳丘の規模は、石室直行方向で12m、石室長軸方向は、石室前面ががけ崩れにより崩壊しており、残存は、11.5mを測る。墳丘北部墳端は、墳丘に隣接する轟石を迂回するように大きくへこみ、南部はいくぶん張り出すといった、多少いびつな墳形を呈する円墳であったことが判明した。墳丘高は、墳丘頂部が大きく削平されていたが、北々西肩溝部で約90cmを測る。

墳丘は石室との直行軸方向が尾根線とほぼ平行して斜面に位置し、尾根線の傾斜が古墳のあたりから徐々に急激になっているため、下記の石室直行方向の土層断面観察によると、石室から南々東方向と北々西方向とでは、大きく異なる状況を呈していることが判明した。

石室から南々東方向の墳丘構築にあたっては、土層断面観察および盛土除去後の状況から、この付近には旧表土に相当する黒色腐植土は確認されず、構築にあたっては若干地形を削平し、整地を行っている模様である。石室掘り方内の埋土は、墳丘盛り土のものとはほぼ同一の一なものである。

これに対して、石室から北々西方向の墳丘構築にあたっては、土層断面観察によると、石室掘り方肩部から墳端手前までの間に、旧表土に相当すると思われる黒色粘質土が確認され、この付近では旧表土上に盛り土が行われているようである。石室掘り方内の埋土は、石室側壁のほぼ中央の高さから石室掘り方底部まで斜め下方向に灰褐色の粗砂が堆積しており、その灰褐色粗砂の堆積と石室掘り方の地山面までの間に、暗褐色粘質砂と黄褐色粘質砂が交互にほぼ水平な堆積が見られる。また、石室掘り方肩部から石室掘り方底部にかけて約20cm～50cmの石材が数個置かれた。

表土除去後の観察によると、石室北々西側の石室掘り方内の土層断面観察ラインをほぼ中心に、開口部の長径約2m20cm、短径約1m60cmで、石室側壁根石の底部付近までの深さの堅穴が、石室側壁に沿って掘られているのを確認した。この堅穴は、土層断面観察および盛土除去後の観察の状況から判断して、後年の盗掘痕ではないかと思われる。

奥壁周辺部の墳丘構築は、石室長軸方向の土層断面観察において、側壁周辺部の墳丘構築と状況が異なることが判明した。側壁周辺部の墳丘構築は、地山面である石室掘り方が側壁からすぐに立ち上るのに対して、奥壁周辺部の地山面は、石室内地山面より約20cm高い位置の奥壁外側から、約1m70cmの間レベルを約20cmなだらかに下降させ、その後約60cmの間で約25cmレベルを上昇させる間地山面を掘り込んでいる。

盛土除去後の状況は、急激な角度をもって存在する石室掘り方が奥壁背後付近には存在せず、緩やかな角度をもって奥壁背後付近が開口している模様である。おそらく、石室開口部前面が急峻な斜面となっている位置に古墳を設置したために、石室前面から石材が搬入できず、やむを得ず石室奥壁背後から石材を搬入するため、奥壁背後付近の地山を掘削したのではないかと思われる。

## 2. 周 構

土層断面観察および盛土除去後の観察により、墳丘の北から西北西にかけて長さ約6m、幅約2m、C-Dライン（石室直行方向北西側断面）において周溝内堆土約35cmを測る周溝が、わずかに残存しているのが確認できた。その他の部分の周溝、特に古墳南西側はすでに崖崩れをおこしているために確認できなかった。

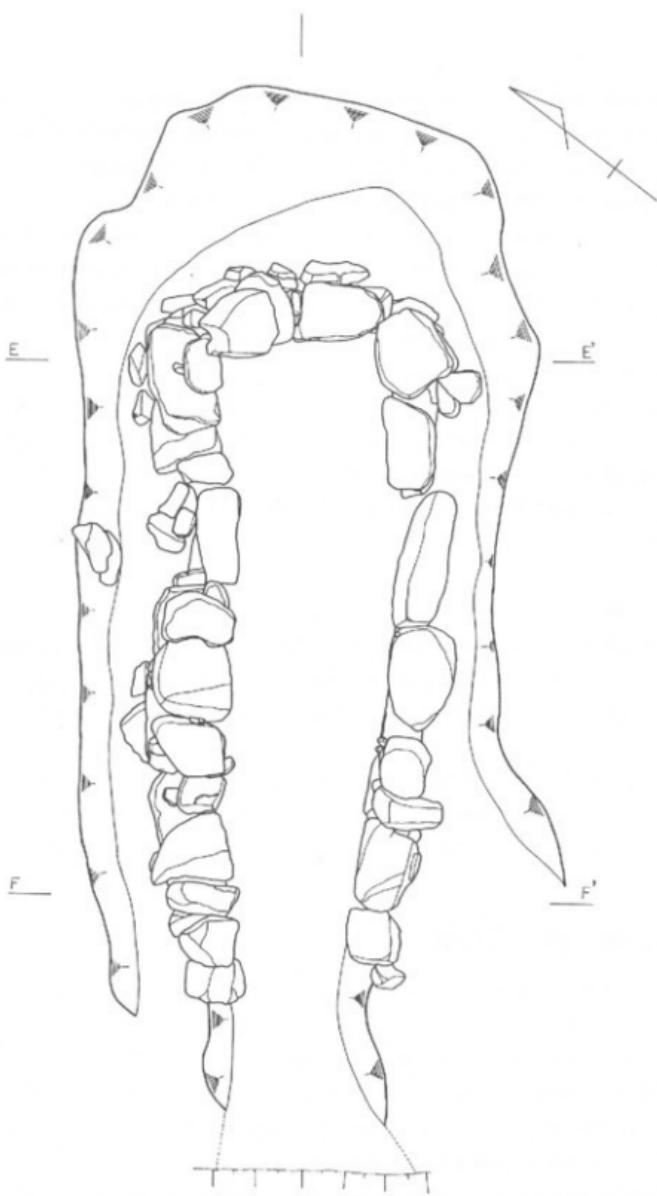
これは、前記のとおり古墳が尾根先端部の稜線からわずかに南西方向に下った緩斜面に築造されており、古墳付近から南東方向に傾斜が徐々に急激になっていくため、残存部以外の周溝は、雨水あるいは治山および植林事業等によりすでに崩壊してしまったのではないかと思われる。

## 第3節 横穴式石室

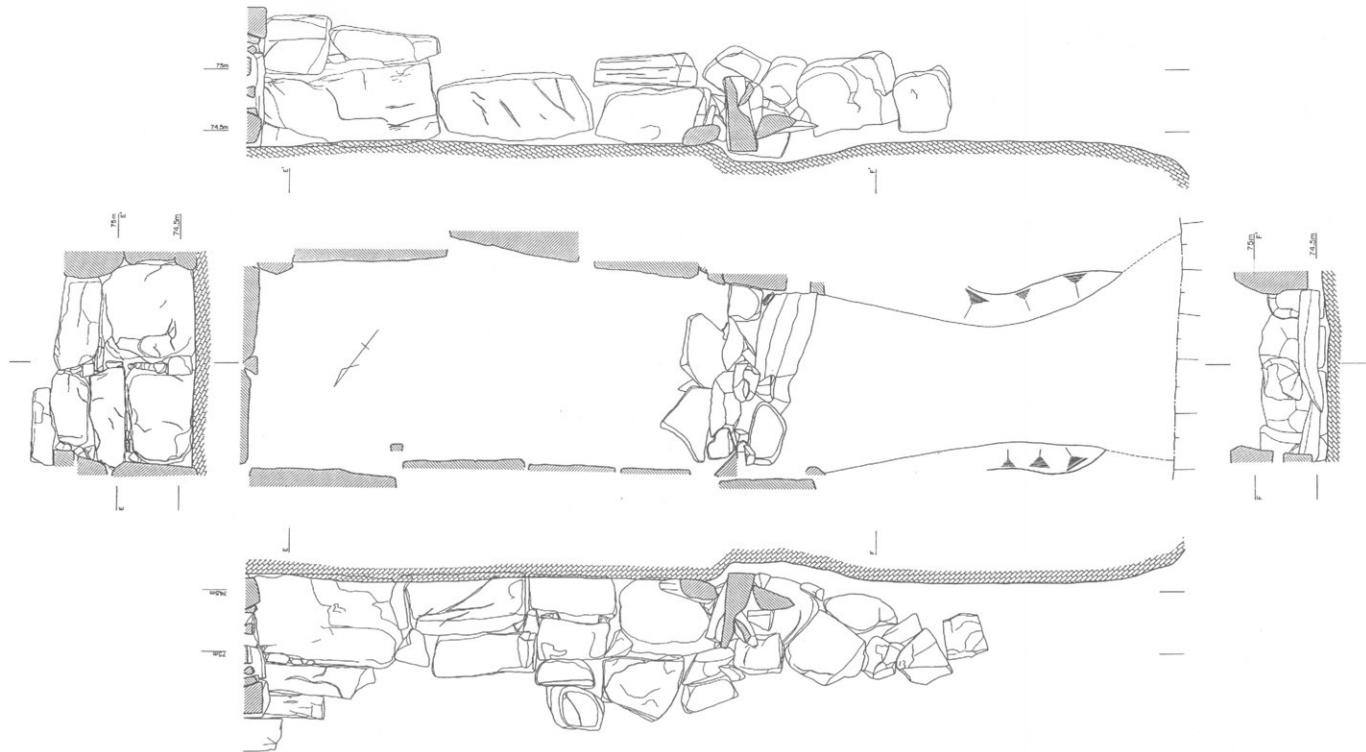
本古墳の内部構造は横穴式石室である。調査前の状況は前述のとおり、大井石はすでに除去されており、天井石であったと思われる石材がわずかに1個残存するのみであるが、すでに移動されたものである。墓道入口は崖崩れによって崩壊しており、調査前に閉塞石および側壁のものではないかと思われる石材が、墓道入口周辺の斜面で数個確認できた。

石室内には墳丘盛土が崩落し二次的に側壁上端まで堆積しており、表土除去後において、奥壁および石室北側側壁の残存最上部の石材が一部確認できた。

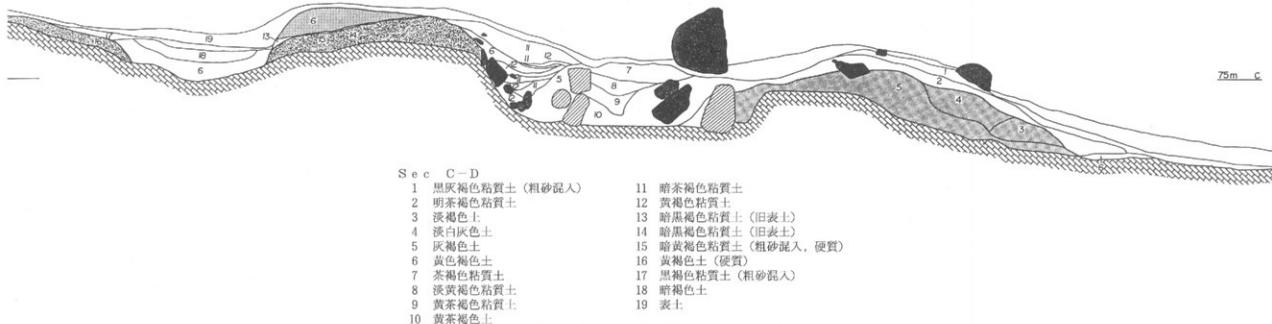
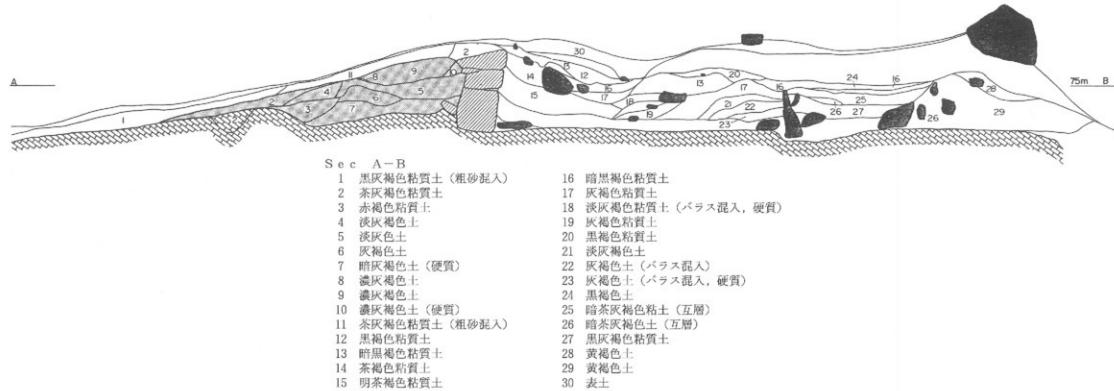
石室は無袖の横穴式石室で、石室床面での計測値は、後述する仕切り石までの全長5.95mを測り、同じく南東側残存側壁端までは5.7mを測る。なお、第7・9図においては74.5mのレ



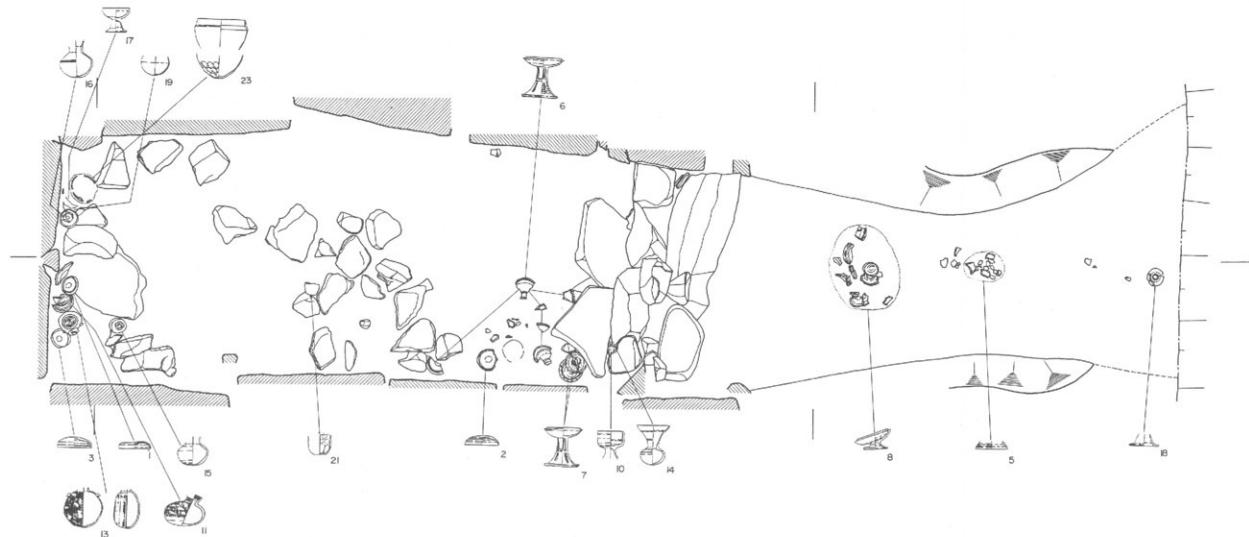
第6図 石室平面図 (1/50)



第7图 横穴式石室实测图 (1/30)



第8図 填丘・周溝土壟断面図 (1/25)



第9図 石室内遺物出土状況 (1/25)

ベルで石室平面図を表わしたため、北西側側壁では奥壁から4.35m、同じく南東側側壁では奥壁から4.2mまでしか図示できていない。また、74.5mのレベルでの、奥壁から後述する仕切り止までは3.7mを測る。奥壁幅1.6m、F-F'間の右室幅1.35mを測る。床面からの右室高は、奥壁残存最高部で1.3m、F-F'側壁残存最高部で0.8mを測る。石室平面形から判断すると、北西側側壁はほぼ直線的に配列しているのに対して、南東側側壁は奥壁から2.7m付近より入口に向かって徐々に内側に狭まっている。石室中心軸の方向はMW-30°-Sを測る。

奥壁は、南東側に一辺約80cmのはぼ立方体の石材を配置し、北西側に幅約80cm、高さ約55cmの石材を置いてそれぞれ根石としている。南東側の根石の上には、幅約75cm、高さ約40cmの石材を横口積みとしており、北西側の根石の上には幅約80cm、高さ約30cmの石材を、幅約70cm、高さ約35cmの石材の上に重ね、さらにその上に幅約64cm、高さ約20cmの石材をそれぞれ横口積みとしている。南東側2段目の石材の上部と、北西側3段目の石材の上部はほぼ同レベルである。奥壁左右のそれぞれの石材の間には数個の割石を詰め込み、北西側根石と2段目の石材の隙間と、北西側3段目と北西側側壁との間にもそれぞれ数個の割石を詰め込んでおり、奥壁にはわずかに持ち送りがみられた。

ほぼ直線に配列された北西側側壁は残存全長5.4mを測る。比較的残存状態のよい奥壁寄りの側壁には若干持ち送りがみられ、広口積みにされたほぼ中央部の根石は外側に傾いてしまっている。

これに対し、南東側側壁は残存全長5.51mと、長さは北西側側壁とはほぼ同規模ながら、2段あるいは根石のみ残存しているといった状況である。北西側側壁に対応する、同じく広口積みにされたほぼ中央部の根石は内側に傾いてしまっている。

両側壁とも根石は広口積みであるが、2段目からは横口積みとなっている。また入口側は転石の比較的整った面を内側に使用しているが、奥壁付近の側壁石材は、整形した石材の平面を内側に使用している。整形された根石は、奥壁から入口に向かって徐々に小型になっており、石室と羨道の区別が意識されたものであろう。

天井石は前述のとおり発掘調査前から天井石であると推定される、長辺約220cm、短辺約80cm、厚さ約80cmを測る石材が確認されたが、石材はすでに表土上にあることから、盜掘を受けた時点で振り出され放棄されたものと考えられる。現在残存している石室および羨道の規模を考え合わせると、最低6枚はこの石材と同規模の天井石が必要であり、羨道部が今少し長かったのであれば、さらにもう1枚の天井石が必要となるであろう。

床面に目を向けると、奥壁前面中央部と石室中央部に棺台に使われていたと思われる一辺約55cm~8cmの割石が約25個看取された。また、石室と羨道の仕切りに使われていたと思われる、幅約55~25cm、厚さ約25~15cm、高さ約60~50cmの割石が4枚、奥壁から約3m90cmの位置に石室に直行して屹立している。直列する4枚の石材の長さは約1m55cmで石室の幅に等しく、床面に振り方を約15cmの深さに掘り込んで設置されている。それぞれの石材は平面を石室

側に向けて石室を完全に区切っており、墓道との区別を意識したものであろう。仕切り石の支えとして、長さ約1m～50cm、幅約40cm～30cm、厚さ約20cm～15cmの石材が、仕切り石に接する床面に前後に2枚ずつ設置されている。

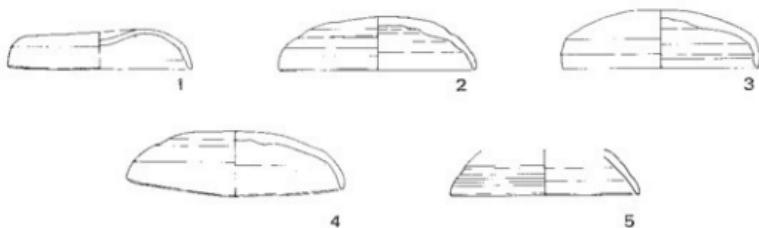
本古墳の閉塞施設については奥壁から約5mの位置に、約30～20cmの割石が10個ほど乱雑に積み重ねられていた。閉塞石からは幅約1m20cm～90cmの平坦な墓道が約1m続き、崖崩れにより墓道入口部は消失している。後述するが、追葬時に廃棄されたと思われる遺物片が、閉塞石付近から墓道入口消失部付近まで連続して散布している。しかし、墓道口消失部から続く斜面からは遺物は検出されなかった。従って、墓道は崖崩れの影響をほとんど受けず、ほぼ現状のまま検出されたのではないかと思われる。

## 第4節 遺 物

### 1. 遺物の出土状況

石室内において、副葬品が集中した場所は、奥壁に接する位置と、前述の仕切り石内部北側とその周辺からおもに検出された。また、追葬時に掘り出されたと思われる副葬品が閉塞石外の墓道から検出され、墳丘南斜面および北側周溝内からも数点の遺物片が検出された。また、仕切り石の立石と支え石に挟まれる形で出土する遺物もみられた。

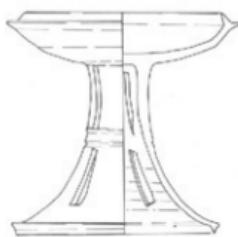
石室内堆積土の状況は、天井石が全て失われていることによって、墳丘盛り上がりが石室全体にわたって三次的に堆積している。



第10図 出土遺物(1)(1/4)

石室奥壁前面には、奥壁および奥壁付近の側壁のものと思われる、一辺約20cm～80cm石材が数個転落している。この転落石は天井石が除去された時に転落したものと思われるが、天井石が除去された時点では、すでに転落石下のレベルまで石室内に二次堆積があったと思われる。

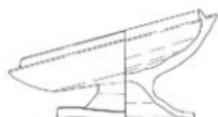
前節の記述のとおり、南東側も北西側も、ほぼ中央の側壁は大きく傾いている。北西側の傾いている側壁に接する位置の右室掘り方内に、後年の盗掘痕と思われる土壌が掘られているこ



6



7



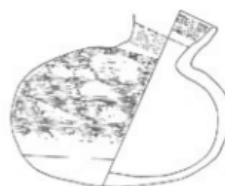
8



9



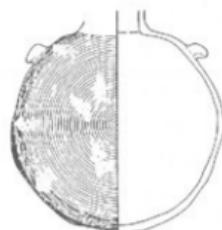
10



11



12



13

第11図 出土遺物（2）（1/4）

と。傾いている南東側と北西側の側壁間の石室床面からは、遺物が検出されなかったこと等の状況から判断して、石室内中央部から北側掘り方内にかけて、石室を直行してかなり大規模な盗掘を受けていると思われるが、奥壁前面と仕切り石付近に集中して遺物が残存していることから、この付近の盗掘は小規模なものに留まっているものと思われる。

14

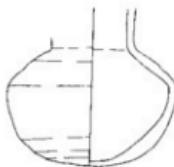
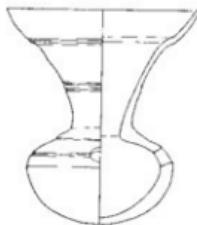
## 2. 出土遺物

出土遺物に関して、実測の可能なものについて図化を行い、図化した土器の形態や調整等については観察表および計測表を作成した。

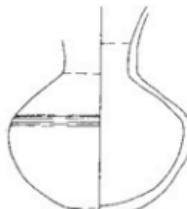
### ・須恵器

16点を図化したが、器種は杯蓋・高杯・横瓶・提瓶・聴・短頸壺・直口壺などである。破片として出土したほとんどの遺物については復元、あるいは一固体と推定することができたが、脚台部(9)のみで器形の断定をしかねるものもみられる。杯蓋(2)有蓋高杯(6・7)については攪乱により現位置をとどめていないのではないかと思われる。杯蓋については、口径12.4~14.7cmと個体差があり、いずれも同形同大ではない。杯身は出土しておらず、ほぼ完形に復元された有蓋高杯は3点あるが、そのいずれとも対応しない。

(1・3・11・13・14・15・16)は奥



15



16

第12図 出土遺物(3)(1/4)

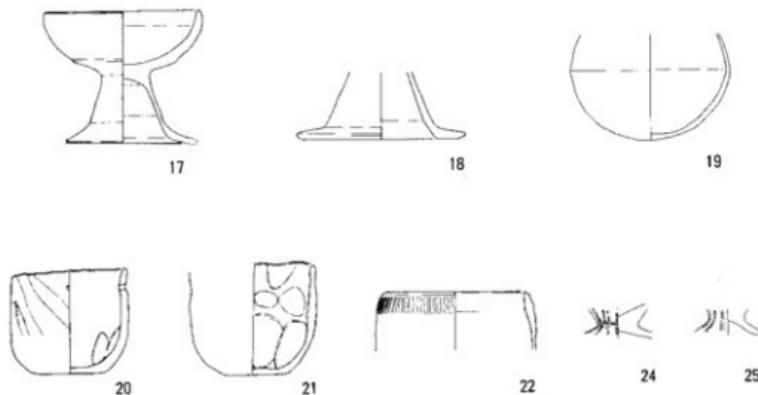
壁に接する位置、(2・6・9・10)は仕切り右内部北側に接する位置とその周辺、(5・8)は閉塞石外の墓道からそれぞれ集中して検出された。

#### 。土 師 器

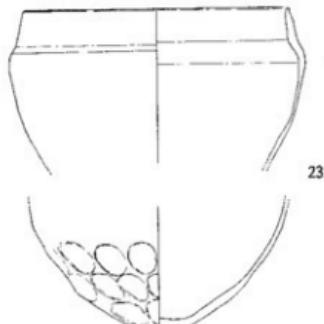
(17~19)の3点を図化したが、器種は高杯、鉢および脚台部のみの器形の断定しかねるものもみられるとともに、作図不可能な細片が多数出土した。

#### 。製 塩 土 器

(20~25)の6点を図化したが、上部器同様図化したもの以外に作図不可能な細片が多数出



第13図 出土遺物(4)(1/4)



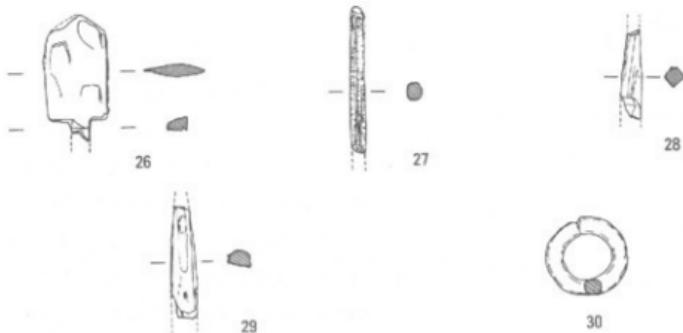
上した。(20・21)は粗製の小型鉢形土器である。(20)は完形であり、遺物の集中した石室奥壁付近の棺台とみられる割石下から検出された。最大径9.6cm、口径8.2cm、高さ7.6cmで、内外ともに指頭圧痕が認められる。また口縁部から約1cmの位置に、焼成前にあけられたと思われる、口径0.4cmのほぼ真円の穴が外部から内部に貫通している。(21)はほぼ完形のまま石室のほぼ中央の床面に接して検出された。推定最大径8.8cm、推定口径8.1cm、高さ8.25cmで、内部に指頭圧痕

が顕著に認められる。(20・21)ともに端部は丸く、底部はほぼ平坦に仕上げられている。胎土中には細砂を多少含み、焼成は良好である。いずれも二次的な焼成を若干受けたと推測され、部分的に黒褐色を呈している。(22)は口縁部と底部が直接接合しないが、胎土、焼成、色調等から同一個体である可能性が高い。最大径21.2cm、口径18.5cmで、底部外側に指頭圧痕が顕著に認められる。底部が黒褐色を呈することから、若干二次的な焼成を受けたと推定される。(23)は口縁部のみの残存で器種の断定はしかねるが、おそらく楕円形土器であろう。推定最大径11.5cm、推定口径10.3cmで、口縁部周囲に長さ約1.2cm、幅0.2~0.3cmの縦方向に並行する粗い調整を、ヘラにより施している。(24・25)は、粗製の台付鉢形土器である。いずれも石室内から出土せず、墳丘の検出に際して出土した。脚部はいずれも底部に貼り付けており、体部は斜め上方へ立ち上がっているが、口縁部は欠損して不明である。脚部外面の貼り付け部分には指頭圧痕が認められる。細砂をわずかに含み、焼成は良好である。残存がわずかであるため、二次的な焼成を受けているのかどうか確認はできなかった。

#### ・鉄 器 他

14点出土しているが、図化した5点以外のものは錆化して剝離したり攪乱により細片となっている。すべて床面に近い石室内堆積土をフリイにかけて検出したもので、現位置は不明である。

鉄鎌 (26) 鎌幅2.2cmの鎌身をもつ、幅広の平根式である。



第14図 出土遺物 (5) (1/4)

鉄釘 (27~29) 3点を図化したが、一辺0.8~0.3cmの断面が方形のもの (27・28) と、長辺0.9~0.6cm、短辺0.5cmの断面が長方形のもの (29) に分類することができる。

耳環（30） 1点が出土したが、やはり床面近くの石室内堆積土をフリイにかけて検出したものである。銹化が進行しているが、金と思われる被膜がわずかに確認でき、銅地金張りの金環と思われる。以下計測値を記す。長径2.9cm、短径1.75cm、断面0.6cm、重さ14gである。

### 出土上器観察表

#### 須 惠 器

番号	器種	最大径	口 径	高さ	胎 土	色 調	手 法	形 態	燒 成	備 考
1	杯 蓋	13.1	12.4	2.8	細砂を微量含む	黒灰色	ロクロ 右 ヘラ 左 ナデ	良 好	完 形	
2	杯 蓋	14.1	13.5	4.8	細砂を微量含む	暗青灰色	ロクロ 右 ヘラ 左	良 好	朱の痕跡あり 1/3 欠	
3	杯 蓋	14.2	13.1	4.15	砂粒を微量含む	暗青灰色	ロクロ 左 ヘラ 右 ナデ	良 好	完 形	
4	杯 蓋	15.5	14.7	4.65	細砂を微量含む	灰 色	ロクロ 右 ヘラ 左 ナデ	普 通	完 形	
5	杯 蓋	13.5	13.3	—	細砂、微砂を微量	淡青灰色	ロクロ 左 ナデ	やや軟質	頂部欠	
6	有蓋高杯	16.6	13.9	15.8	細砂、砂粒を少量	灰 色	ロクロ 左 ナデ	良 好		
7	有蓋高杯	16.05	13.45	15.6	細砂をわずか含む	黒灰色	ロクロ 左 ナデ	良 好		
8	有蓋低脚 高杯	—	7.8	13.1	砂 粒	淡青灰色	ロクロ 右 ヘラ 左 ナデ	やや軟質	ほぼ完形、口 縁部一部欠	
9	脚 台	底部径 10.9	—	残存高 5.1	砂粒、細砂を少 量含む	明橙褐色	ロクロ 右 ナデ	やや軟質	脚部のみ	
10	脚付き椀	10.7	10.1	—	細砂をわ ずか含む	暗 灰 色	ロクロ 右 ナデ	やや軟質	脚先端部欠	
11	横 瓶	15.7	5.4	—	細砂を少 量含む	暗 灰 色	ロクロ 左 銅部にカキ目	良 好	口縁部一部欠	
12	横 瓶	—	2.7	—	微 砂	淡青灰色		良 好	1/3 残存	
13	提 瓶	15.4	—	—	細砂少 量	淡青灰色	ロクロ 右 ヘラ 左 銅部にカキ目	良 好	口縁部欠	
14	禮	13.7	13	10.4	砂粒をわ ずか含む	暗青灰色	ロクロ 右 ヘラ 左 ナデ	良 好	口縁2/3欠	
15	短頸壺	12.2	—	—	細砂をわ ずか含む	黒 灰 色		良 好	口縁部欠	
16	直口壺	13.2	6.4	14.8	微 砂	淡灰褐色	ロクロ 右 ヘラ 左 ナデ	軟 質	口縁部欠 底部に×印	

## 土 飾 器

番号	器種	最大径	口径	高さ	胎土	色調	手法形態	焼成	備考
17	高杯	11.45	11.05	9	微砂	明赤褐色		軟質	口縁部1/3 脚先端部欠
18	脚台	12.05	-	-	細砂を多量に含む			やや軟質	
19	鉢	11.3	-	-	微砂	明赤褐色		軟質	1/3欠

## 製 塙 土 器

番号	器種	最大径	口径	高さ	胎土	色調	手法形態	焼成	備考
20	小型鉢	9.6	8.2	7.6	細砂を多少含む	淡茶褐色～黒褐色(2次)	内外ともに指頭圧痕	良好	完形
21	小型鉢	-	-	-	細砂を多少含む		内部に指頭圧痕	良好	1/4欠
22	鉢	21.2	18.5	-	微砂	淡茶褐色～黒褐色(2次)	底部外側に指頭圧痕	良	1/3欠
23	椀	11.5	10.3	-	微砂	赤褐色	口縁にヘラ調整	良好	口縁1/2残
24	台付深鉢形土器	-	-	-	細砂を少量含む	淡灰褐色	外部は指頭によるナデ上げ、底部に貼り付け	良好	脚部のみ
25	台付深鉢形土器	-	-	-	細砂を少量含む	赤褐色	外部は指頭によるナデ上げ、底部に貼り付け	良好	脚部のみ

## 第4章 まとめ

今回発掘調査を実施した地蔵山1号墳は、岡山県玉野市玉3丁目2500-8に所在し、玉野市海岸部あるいは、地蔵山1号墳から見渡せる瀬戸内海に浮かぶ島々に存在する古墳時代の遺跡の性格から、地蔵山1号墳の性格もおおよそ判断することができた。

当古墳が周知されたのは比較的新しく、1975（昭和50）年刊行の『玉野市文化財地図』により地蔵山1号墳は初見され、1978（昭和53）年に刊行された『岡山県遺跡地図』には、地蔵山付近が「地蔵山遺跡」として記載され、古墳が所在するとされている。地蔵山1号墳付近の山間部は、1919（大正8）年から継続して操業されている三井造船所の敷地であり、自由に立ち入ることができなかったために確認できず、最近になって周知されたのであろう。なお1970（昭和45）年に刊行された『玉野市史』には、「横穴式石室を有する古墳が三井造船所敷地内の地蔵山に存在したが、すでに消滅し、遺物は造船所内で保管している。」とあるが、この古墳は前述した地蔵山2号墳のことと思われる。

しかし、戦前には地蔵山1号墳から金の劍が発見されたといった話や、戦時中には地蔵山1号墳の所在する尾根上に高射砲の陣地があったらしい話があることから、ごく一部ではかなり以前から周知されていたのではないかと思われる。

発掘調査によると地蔵山1号墳は、第3章の記述のとおり、地蔵山から南東方向に派生した尾根の稜線から若干南西側に下った、北々西と南々東の墳丘部での比高差1m20cmを測る斜面に、南西に開口する横穴式石室を内部主体とする径12m×11.5m、残存最高90cmを測る円墳であり、周溝は墳丘の北から西北西にかけてわずかに残存している状況であることが判明した。

地蔵山1号墳の内部主体は横穴式石室である。石室の仕切り石までの全長3.7m、仕切り石から羨道部残存側壁端までは2m、奥壁幅1.6m、奥壁残存最高部高は1.3mを測る。石室平面形から判断すると、北西側側壁はほぼ直線的に配列しているのに対して、南東側側壁は奥壁から2.7m付近から入口に向かって徐々に内側に狭まっている。石室の平面形は無袖の横穴式石室であるが、仕切り石の設置によって玄室と羨道部の区別が意識されている状況である。

埋葬土体は、石室中央部の攪乱が著しく、棺痕跡を含めて確認は行えなかった。しかし、墓道部に遺物が散在していること、副葬品が現位置を保っていたと思われる場所が2ヶ所あることなどから、多くの横穴式石室墳の例にもれず、追葬による複次埋葬が行われたことがうかがえる。

出土遺物は須恵器、土師器、製塩土器、鉄器、耳環等であるが、当古墳はすでに盗掘をうけ

ていたため、副葬された当時の状態の石室内から出土したと考えられる遺物のうち須恵器については、杯蓋（1・2）、脚付き碗（10）、横瓶（11）、提瓶（13）、翫（14）、短頸壺（15）、直口壺（16）であった。このうち古墳の時期について偏年が整備されている須恵器の有蓋杯に対応する、杯蓋に注目して陶邑の偏年（注1）と比較すれば、7世紀前半のうちでも古い年代が考えられる。

同様に盗掘により副葬当時の位置を保っていないと考えられる杯蓋（2）および墓道部に施棄されたと思われる杯蓋（5）について陶邑の偏年と比較すれば、（2）は6世紀後半のうちで新しい年代、（5）は6世紀後半のうちで古い年代が考えられる。

以上のことと検出された鉄釘のことを考えあわせると、この古墳は少なくとも3回の追葬を受けていると思われる。

地蔵山1号墳からは7点の國化可能なものと、多数の細片となった製埴土器が検出された。当古墳近辺の占墳で製埴土器が副葬された例は、宇野港外に位置し、現在の行政区分は香川県に属する喜兵衛島6・13号墳（注2）や、倉敷市児島・琴海1号墳（注3）および前述の地蔵山2号墳等である。前述のとおり地蔵山1号墳の眼下海岸部には、すでに消滅しているが製埴遺跡が存在していたことから、地蔵山1号墳は、弥生時代中期後半より瀬戸内海沿岸で盛んに行われた土器製塗に関わった、古墳時代後半の集団の墳墓ではなかろうか。

なお、地蔵山2号墳から出土した副葬品は、地蔵山1号墳の副葬品とはほぼ同時期からやや古いものがみられることから、地蔵山1号墳の存在する地域は、土器製塗が連続して盛んに営まれていたものと思われる。

（注1）田辺昭三『陶邑古窯地群』（『平文学会論叢』第10号） 平安学園考古学クラブ 1966年

（注2）喜兵衛島発掘調査団「謎の防波堤——瀬戸内海喜兵衛島の考古学的調査報告——」『歴史評論』

1956年1月号 民主主義科学者協会歴史部会 1956年

（注3）山崎康平・福田正麻『本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査』（「倉原・琴海1号墳」

『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』36 岡山県教育委員会 1960年



1. 地蔵山 1号墳遠望（北から）



2. 調査前墳丘遠景（北から）

図版 2



1. 調査前墳丘 (北から)



2. 調査前墳丘 (南から)



1. 調査前墳丘及び石室状況（北から）



2. 表土除去後墳丘及び石室状況（北から）

図版 4



1. 墓丘全景（北西から）



2. 墓丘全景（北から）



3. 調査後石室（西から）



1. 填丘及び周溝（北東から）



2. 周 溝（東から）

図版 6



1. 填丘北々東側土層断面  
(北東から)



2. 周溝内埋土状況  
(東から)



3. 石室内空掘壙土層断面  
(東から)



1. 墳丘東南東側土層断面（北東から）



2. 墳丘南々西側土層断面（南から）

図版 8



1. 石室内落石及び仕切り石状況（西から）



2. 石室内落石及び仕切り石状況（東から）



1. 石室内遺物出土状況 1 (東から)



2. 石室内遺物出土状況 2 (東から)

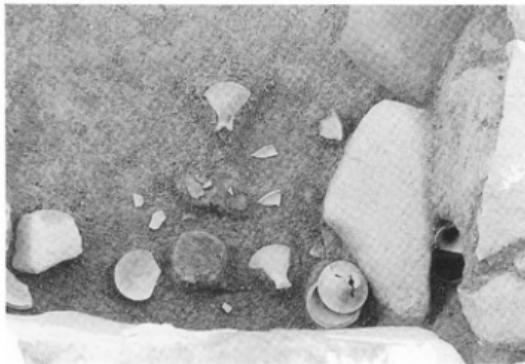
图版10



1. 石室内遗物出土状况 3



2. 石室内遗物出土状况 4



3. 石室内遗物出土状况 5

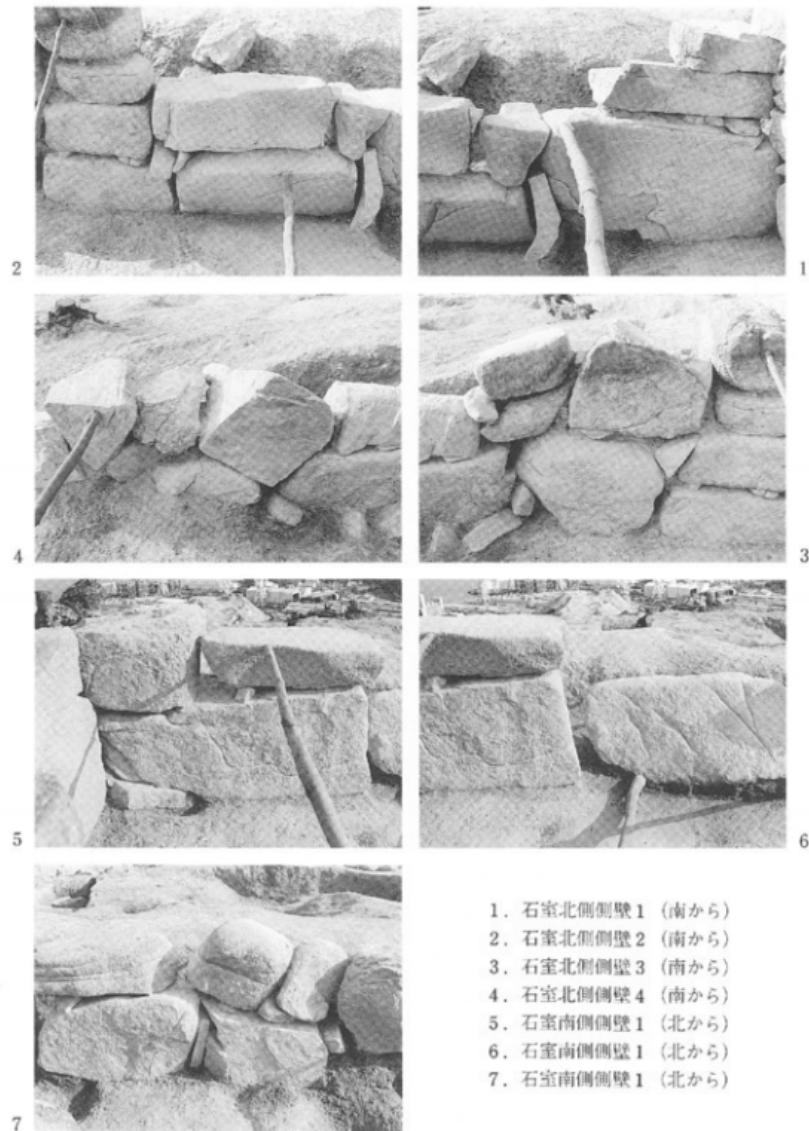


1. 墓道部遺物検出状況



2. 石室内棺台検出状況

図版12





1. 石室奥壁（西から）



2. 墓丘盛り土除去後石室全景（北西から）



1. 墳丘盛り土除去後石室全景（北東から）



2. 南側石室掘り方状況（南東から）



1. 北側石室掘り方状況（北東から）

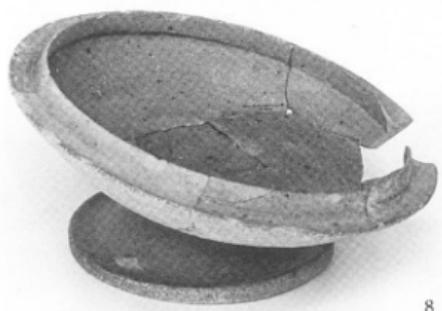


2. 地蔵山1号墳調査終了後遠景（北から）

図版16



出土須恵器 (1)



8



9



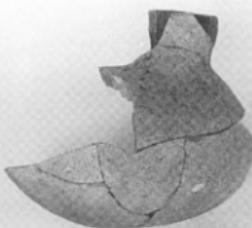
10



11



12



12

出土須恵器 (2)

図版18



出土須恵器 (3)



17



18



19



20



22



21



22

出土製塩土器 (1)

图版20



出土製鹽土器 (2)



出土金屬器

玉野市埋蔵文化財発掘調査報告書（5）

## 地蔵山1号墳

平成4年3月21日 印刷

平成4年3月31日 発行

編集 玉野市教育委員会

発行 地蔵山遺跡発掘調査委員会

印刷 西日本法規出版株式会社

